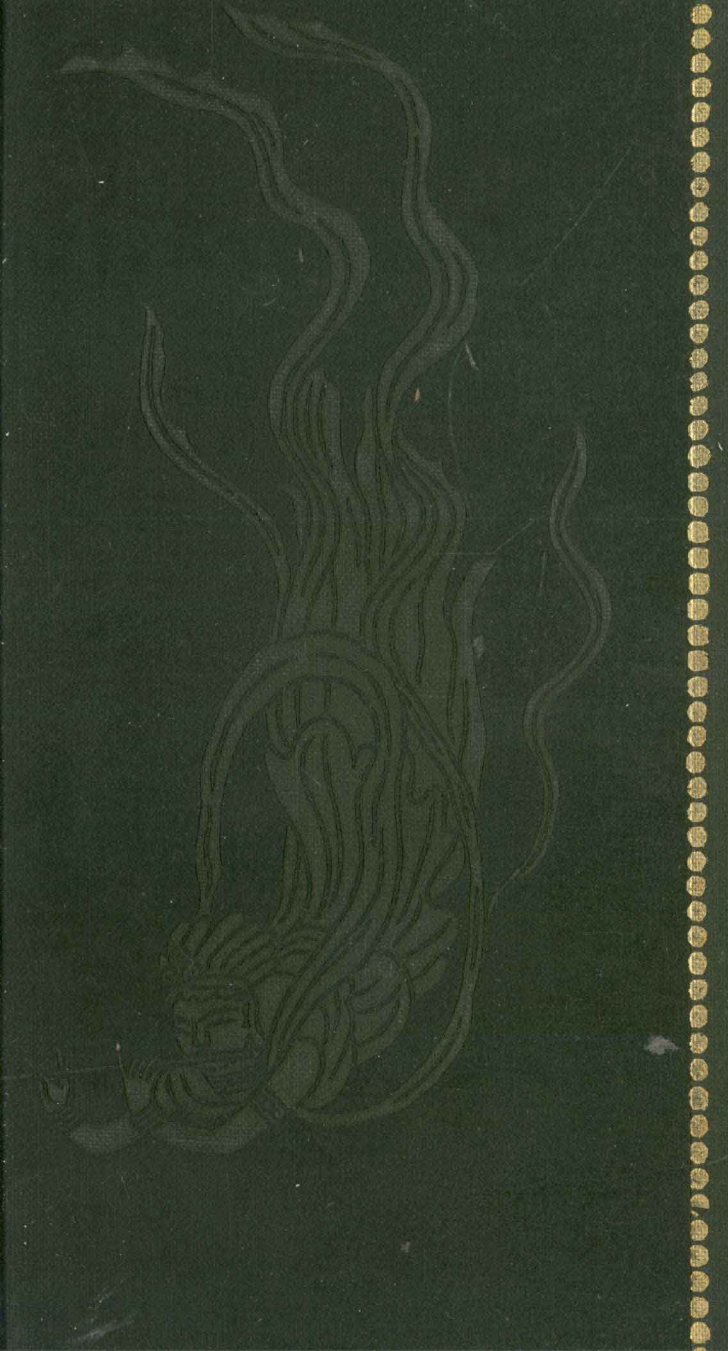

太平記（上巻）

校註

日本文學大系

第十七卷

解題

太平記

文學博士　尾上八郎

武家政治が一たび起つて、鎌倉幕府が確立してから、天皇は虚器を擁せられるのみとなつた。幕府は、表面は恭順でも、裏面は壓迫を加へ奉つた。この變態政治は、國體上極めて不都合なものである。政權は皇室の有であらねばならぬ。この信條の下に、後鳥羽院は、幕府を倒すべく、種々御計畫があつた。源實朝が兇刃に倒れて、藤原頼經の二歳なのが迎へられて將軍となり、北條義時が專ら權を握つた等、幕府に樣々の内變があつた。その義時は、院の御旨を抑へて執行せぬ事などもあつたので、院はいよ〳〵御決意になり、武士を召して北條氏討伐を企てられた。しかし力の時代がすでに來てゐるので、事は遂に成らず。院及び土御門、順德の三上皇は、遠國に御移りにならねばならなかつた。北條氏は、かく三上皇を遷し奉つてから、遂に皇位の繼承にま

で關係するやうになつた。この故に、朝廷と幕府との關係は頗るむづかしいものとなつて來た。で、幕府は、守護を名として、兩六波羅府を置いて、朝廷を監視した。この亂に際して、朝廷の召に應じた武士は、皆所領を奪はれた。爲に幕府に對する憎惡も深く、建武中興の時になると、多くは皇室の御味方を申し上げた。

この承久の大變以後、幕府は、後堀河天皇を位に卽け奉つた。その御子の四條天皇は、この後を承けさせられたが、崩御になつたので、承久の際土御門院が、後鳥羽院を諫めさせられたのを知つて、幕府はその皇子の後嵯峨天皇を立てた。天皇は、第一の皇子の後深草天皇に御讓位があつたが、また、後深草天皇をして、第二の皇子の龜山天皇に讓らしめられた。こゝで、皇統は二流となつた。一は、後深草天皇の流卽ち持明院流、二は、龜山天皇の流卽ち大覺寺流である。

後嵯峨上皇は、龜山天皇の次に、皇子の後宇多天皇を立てられた。後深草上皇は、これに對して甚しく御不滿に居られたので、幕府はこれに同情して、後宇多天皇の後に、後深草上皇の皇子乃ち伏見天皇を御立て申した。この派の人々はこれを機として、皇位を持明院流のものとしようとして、幕府に運動したので、幕府は、伏見天皇の皇子を、その後に立てた。これが後伏見天皇である。大覺寺流の人々は、幕府が、後嵯峨院の遺詔に背いたのを責められたので、幕府は、ま

た後宇多天皇の皇子卽ち後二條天皇を、後伏見天皇の後に立てた。後二條天皇崩御の後、伏見天皇の皇子の花園天皇が御立ちになつた。花園天皇の後を、後宇多天皇の御子の後醍醐天皇が御繼ぎになつた。後醍醐天皇の皇太子には、後二條天皇の皇子の邦良親王が御立ちになつたので、後伏見上皇は憤慨せられた。その中、邦良親王が御早世になつたので、後醍醐天皇は、その皇子を太子とせられようとしたが、持明院流の人々が幕府を動かした結果、後伏見天皇の皇子量仁親王が、皇太子となられる事となつた。後醍醐天皇は、深く幕府の處置を御憤になり、幕府の政綱が弛緩してゐるのに乘じ、後鳥羽の御遺志を繼いで、關東征伐を御企になつた。しかし、初一度は御失敗になつたので、幕府は、これを隱岐に移して、持明院統の皇太子量仁親王乃ち光嚴天皇を擁立した。然るに、時運一轉して、北條氏が、甚しく武士の心を失ふと、後醍醐天皇の皇子の護良親王が激勵せられるのとで、叛亂が諸處に起り、天皇も隱岐から逃れて、伯耆に御出になる。各處の勤王軍が、頻りに進むと、兩六波羅も覆滅し、また鎌倉も陷落して、北條氏は遺憾なく叩きつけられた。これによつて、天皇の御企圖が成就し、又後鳥羽院の御遺志も遂げられたのであつた。これで、變態の武家政治は、天皇親政の正體に復歸したとともに、光嚴天皇は、御位を失はせられた。然るに、この狀態は永く續かなかつた。武家政治の希求者は意外に多く、その統領

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

たる足利尊氏は、これらを率ゐて、遂に天皇に叛いて、兵を擧ぐるに到つた。そのために、こゝに未曾有の大爭亂が始まる事となつた。機敏な尊氏は、光嚴天皇の御弟の光明天皇を擁立して、朝敵の名を逃れた。後醍醐天皇は、吉野に據つて朝廷を開かれたので、これから大覺寺流は吉野にあつて南朝といはれ、持明院流は京都にあつて北朝といはれた。こゝに於て、公家武家の爭は一轉して皇室兩流間の御爭となつた。この後醍醐天皇の御卽位の文保二年から、後光嚴天皇の應安元年までの間、凡五十餘年間の大動搖大禍亂、ことに、南北朝間の爭鬪を詳細に記述したものが、卽ち太平記である。

太平記は四十卷、作者は今日猶不明である。洞院公定公日次記に、「應安七年五月三日、戊辰、傳聞、去廿八、九日之間、小島法師圓寂云々、是近日、翫天下、太平記作者也。凡雖爲卑賤之器、有名匠聞、可謂無念。」とある。この應安七年は、太平記擱筆の貞治六年から八年目である。この當時の人の書いた記事は、確かに信用すべきであらう。今日では、隨分代作もあるが、當時はまだ、そんなことも聞えぬ時代であるから、この小島法師自身の作であらう。しかし、この法師は、どんな經歷のある人か、調査すべく、少しの手がかりもないのであるから、精密に考へれば、猶不明といふべきである。書中に、佛法に關した事が甚だ多く、ことに叡山に就いてのこと

が、その大部分を占めて居り、佛法の根本はこゝにあつて、他に在らず。山門の訴訟を被れば、何人も滅亡する。天龍寺の如きも、山門の嗷訴に、かゝはらず、供養があつたので、他の原因もあるが、二度までも燒亡した等、すべて、叡山に多少の非難は向けながら、猶佛法の中心である意氣込で書いてあるところを見ると、作者は此の山で修行した事のあつた人であると思はれる。當時在世であつた今川了俊は、難太平記を書いて、その中に、六波羅合戰の時、名越が討死した後、尊氏が降參したと書いてあるのは、不都合だ。「此記の作者は、宮方深重の者にて、無案内にて、押て如此書たるにや、寔に尾籠のいたりなり。」と罵つてゐる。これによつて見ると、此の作者の小島法師は、叡山に緣故を有し、且つ南朝に隨從した僧侶と想像せられるのである。從來、この書の作者は樣々に云はれてゐた。今それを一顧するのも興味あることである。その大要を擧げて見ると、建武の頃、主上が京都に在しました時、藤原藤房が敕によつて北畠玄惠に命ぜられたので、玄惠は、義貞に會して鎌倉の滅亡を書き、高氏、直義に會して、その隱謀及び六波羅の滅亡を書いた。これが九、十の二卷である。主上は重ねて玄惠に命じて正成の武功を書かせられた。玄惠は藤房に會して、笠置の戰以下君臣苦楚の狀を書いた。これが三、四、五、六の卷である。この戰爭の際の護良親王等の御事を、また玄惠に命ぜられた。玄惠がそれを書き、また赤松

則祐に會して、その戰功を書いた。これが七、八の二卷である。山門の來賢が玄惠と會して、書いたのが、一、二卷である。また同じ頃、主上が山門に在しました時、大友、少貳の事、五大院右衞門の事を、山門の護正院に、又正成討死の事を、善智坊法印に書かせられた。これが十一、十六の二卷である。南岸坊僧正顯信が、義貞の奏狀、尊氏、直義の惡逆を記した。これが十三、十四の二卷である。義貞が箱根の合戰を自記した。これも十四の記の中である。後正平の比、高德入道が、吉野で新帝の敕に依つて、京中の合戰、尊氏の敗北を書いた。これが十五卷である。その中、多々良濱の合戰は、壽榮が書いた。直義が、玄惠に命じて書かしたのが、十二の卷である。次いで、十七、十八、二十三の卷が出來たと見えるが、これは作者が明記してない。高德入道は、義助の敗北、尊氏、直義の惡逆をも書いた。これが二十二である。これが武州入道（細川常久）の燒卻にあつたので今は無い。今の二十二は、二十三から摘出したものである。又多武峯でこの書を書く事、十二卷であつた。作者は六人、敎圓、義淸（高德入道）、行意、壽榮（玄惠の弟子）、證意、蓮秀等である。十一の卷から虛實を正して書いたと云ふ。永德年中、山名氏淸が南方に發向して歸京する時、義用、義可等に命じて、また五卷書かせた。で、都合三十九卷となつた。年久しく經てから、横川の天界坊能鄰が、改めて四十卷とした。これは、太平記評判祕傳理

盡抄に云ふところである。故重野安繹先生は、理盡抄は、その來由書に、大運院が、それを以て祕傳として、諸國を遊歴したとあるから、恐らくは、大運院その人の作であらうかと云はれてゐるが、その人の經歴が分らぬから、その時代をも詳にすることも出來ない。しかし、文明二年に今川心性が、名和肥後刑部左衞門に贈つた書だと云ふ傳がある。これを眞とすれば、その時は太平記の最後の貞治から百年ばかり後の事であつて、あまり多くの隔たりがないのであるから、或は據りどころがあるのであらうか。もししかすると、此の中の兒島高德入道義淸は、公定公日記の小島法師と同人ででもあらうか。さうすれば、この處だけは雙方齟齬せぬこととなる。しかし極めて根據の薄弱な想像であるから、推して云ふ事は出來ない。

この書中の記事は、戰亂が主であるから、これを太平記などといふのは、極めて不都合である。これに就いて、例の理盡抄には、この書は四度名を改めた。一には、安危由來記と云つた。安危の由來を記して、後世の誡とする意である。二には、國家治亂記と云つた。これは、大にしては國、小にしては家の治亂を思量する資料となるからである。三には、國家太平記と云つた。當時の祝の意である。四には、天下太平記と云つた。細川武藏入道常久が、「當代を賀するには、國家といふ要はない。天下太平とあるべきだ。」と云つたので、遂に、かく改まつたと云ふのであ

る。これらも、確實な根據があるであらうか。危いものである。菅政友氏が、「是より先、(細川頼之武藏守となれる應安三年四月以前)正平二十一年、南北講和の議起りて、使者の往來絶えざりしに、二十四年の秋、冬の頃に到りて、その議遂に破れたり。その前後、近畿の地には、戰爭も絶えたりしかば、書名の太平も、それ等によれるにや。」と云はれたのが、眞實であらう。結尾にも、「中夏無爲の代に成つて、めでたかりし事共也。」とある。まことに、これによつて、その書名は出て來たのであらう。

この書の異本は少なくない。參考太平記に擧げてあるのも九種ある。その中、島津家、北條家西源院、南都の四本がことに古い。それらは、皆二十二の卷を闕いでゐる。全體二十一の卷の終に脇屋義助の勢力が、北國で盛になつたので、尊氏が諸將に命じて、これを討たしめるといふ事があつて、その戰爭の記事があるべくしてなく、二十二の卷の初に、義助が敗れて吉野に逃げて來た事が書いてある。この間の記事は、特に作者が省畧したものとは思はれない。必ず例の雄健の筆で大いに書いたものであらう。それが二十二の卷であつたのであらう。然るに、いつしか失せてしまつたので、何人かが遺憾に思つて二十三の卷の中から、數段を拔き出して二十二の卷としたものと見える。それが丁度、前に述べた武藏入道が、越前合戰、義助の敗北、并に尊氏、直

義の一代の惡逆を記したのを、無念の事に思つて、一天下の内を尋ね求めて、二十二の卷を燒き失つたと、理盡抄に書いてあるのに合してゐる。この故に、この卷のない上述の四本は、古本であると思はれると云ふ參考太平記の說は眞に當を得た言と思はれる。この四本の外には、殆んど古本はないと思はれてゐたのに、往年重野安繹先生によつて、又重要な一本が紹介せられた。それは、神田男爵家の藏で、神田本太平記と云はれてゐるものである。これは、紙質も、字樣も、片草兩假名混交の體裁も、元本を去ること遠からぬものと見える。天正本などは、普通本と同樣であるが、この本のは、題目から文段の分け方まで、異なつてゐる。しかして、作り卸しのまゝの眞面目を存したものであるから、「草案の元本」と云はれたのであらうと、先生は、云はれてゐる。まことに、一々に就いて語句を比較して見ると、よほどの差異がある。普通本に、くたぐ〳〵しいところも、この本にはあつさりと書いてある。また普通本の、卑俗で、冗漫であるところも、この本には、雅馴で、簡明である。ことに先生の比較せられた「正成首送故鄕事」の條の如きは、內容は一であるが、語句には非常の差異があり、義貞中國下向の條には、普通本にあつて、この本に無いものが、一千三百餘字もある。その他にも、一々比較して見ると、擧ぐるに堪へぬほどの差異がある。この書中、殊に人口に膾炙してゐる俊基朝臣東下の道行の文にも、よほ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

どの差異があり、しかもこの本のは、頗る簡單に出來てをる。これらによつても、この書は、天正頃までに、漸々に增補し、修正せられたものといふことが明かである。惜しい事は、二十二の卷は勿論であるが、他にも缺卷が多く、全體を窺ひ知る事が出來ないのである。どうかこの缺卷を、何處からか探り出したいものと思ふ。

この書の記事には、昔から誤謬が多いと云はれてゐる。その當時の今川了俊の難太平記が、先づそれを述べてゐる。「此太平記、書あやまりも、空ごとも多きにや。昔、等持寺にて、法勝寺の惠珍上人、此記を先三十餘卷持參し給ひて、錦小路殿の御目にかけられしを、玄惠法印によませられしに、おほく惡ことも、誤も有しかば、仰に云、是は且見及ぶ中にも、以の外ちがひめ多し。追て書入、又切出すべき事等有。其程不可有外聞之由、仰有し。後に中絶也。近代重て書續り。次でに入筆共を多所望してかかせければ、人高名數をしらず書り。さるから、隨分高名の人々も且勢ぞろへ計りに書入たるもあり。一向畧したるも有にや。今は御代重行て、此三四十年以來の事だにも、無跡形事ども、任雅意て申めれば、哀々其代の老者共、在世に此記の御用捨あれかしと存也。」といひ、誤脫、誤謬等の多い事を非難し、更にまた、平家物語に比較して「平家は、多分後德記のたしかなるにて書たるなれども、それだにも、かくちがひめありとかや。まして此記

は、十が八九はつくり事にや。大かたはちがふべからず。人々の高名などの僞り多かるべし。」と云ひ、またこれは一家言ではない、「まさしく、錦小路殿の御前にて、玄惠法印讀みて、其代の事ども、むねとかの法勝寺上人の見聞給ひしにだに、如此惡言有しかば、唯をさへて難し申す」のではない。他人も、自分の如く非難して居ると云ひ、更にまた脫漏が多いとて、六波羅合戰の時、大將の名越が討たれたから、尊氏が先帝に降參したと書いたのは甚しい不都合だ。返す〳〵無念の至である。九州に尊氏退去の時の伴をした人々の氏名も、多く書いてない。篠村八幡宮で尊氏が反覆の時、上矢をあげた役人が二人あつた。その中に、兄の範氏もあつた。これも、書くべきである。また兄と細川と出ると、新田の破れたといふ事も書くべきである。青野原の合戰に故入道殿範國は、手をくだいて戰はれたが、書かないのは無念である等、數多列擧してゐる。これらは、事實さうであらうが、多くは自分一家の吹聽から生れ出た事のやうである。この自己の吹聽を離れての事實の攻究の起つたのは、近頃になつての事である。久米邦武先生の、「太平記は史實に益なし。」又菅政友氏の、「太平記の謬妄遺漏多き事を辯ず。」等の論文は、それである。從つて、重野先生の兒島高德の抹殺論も起つた。これによつて、この書は殆んど信ずるに足らぬもの、文飾に滿ち、誇張の多い一軍談に過ぎぬとせられるに到つたが、此頃に到つて、これらの

中でも、取るべきところが甚だ多いことが論ぜられて、この書の史的價値は、再び認められるに到つた。

この書の記事は、三大部に分るべきであらう。第一部は、後醍醐天皇の關東御誅伐の御企から、建武中興までであらう。第二部は、尊氏の謀叛から、義貞の戰死の頃までであらう。第三部は後村上天皇の御卽位のあたりから、細川頼之が義滿を輔佐する最後のところまでである。第一部は、大覺寺流たる後醍醐天皇が、英邁の資を以て鋭意關東征伐を御計畫になるが、時未だいたらずして御失敗になり、遠島に御移されになる。しかし、反關東の氣運は、諸處に動いて、逃げ隱れながら、活動せられる護良親王の令旨を奉じて、勤王軍が策動する。天皇は、この形勢を御聞きになつて、潛かに幽閉から御脫しになり、勤王軍を御激勵になる。それに名族でありながら、北條氏に驅使せらるゝを甘んぜず、時を窺つてゐた足利高氏が、綸旨を賜はつたので、意を決して歸順したため、兩六波羅は、忽ち滅亡し、また高氏と殆んど同じ原因を有した新田義貞が、兵を擧げたので、鎌倉は陷落し、北條高時以下の人々は、各自殺した。それで天皇は京都に還幸になり、武家政治は全く顚覆して、建武の公家政治が起ることとなつた。この部に於いて、作者は楠正成が、天王寺で見た聖德太子の未來記で、本書の大綱を豫告する方法を取つて居る。乃ち、

人王九十五代の時、一度東魚が四海を呑み、日が西天に一年ばかり隠れる。がまた西鳥が東魚を食ふ。それで、海内一に歸する。しかし、それも僅か三年であるといふので、建武中興の短期なのを示して居る。その結果、獼猴の如き者が現はれて、天下を掠めるのが三十餘年、また一元に歸するといふので、尊氏が、天下を左右するのを述べてゐる。しかして、この「三十餘年」で、作者が擱筆する貞治附近は、戰爭が少ないため、大體太平の有樣であるのを豫告してゐる。この未來記は、藤原定家が、鎌倉幕府時代に、すでに日記に、類似の文を記してゐるのであるから、作者の僞作でもあるまいけれども、これを利用して、全篇の大綱を暗示したのは、作者の伎倆の存するところと思ふ。

第二部は、公家政治が北條氏征伐に御味方をした武士の意に滿たず、それらは、第二の賴朝が出でん事を望んでゐる。こゝに現はれたのは、尊氏である。尊氏は、北條氏の下に居らず、自らその地位に上つて、幕府を建てんことを希望して居り、勤王の將士と意氣が通じないため、身も危かつたので、鎌倉で兵を起すと、所在相應じて、天皇は叡山に行幸せられねばならなかつた。未來記の三年は、こゝで應じてゐる。しかし尊氏は、官軍に打ち破られて、一度九州に逃げ下つたが、隨從者は、賴朝の石橋山から安房に逃げた位に考へてゐた。事實その通になつて、尊氏は

大擧して東上する。この度は光嚴上皇の院宣を拜授したのであるから、持明院流から考へると、立派な官軍である。乃ち兩統の御爭が、干戈に訟へられる事となつたのである。こゝで正成は戰死し、義貞は破られたので、天皇は又叡山に行幸になつた。この以後、京都の回復は出來ず、叡山も粮食が盡きるやうにもなつたので、天皇は、尊氏と和して、京都に、義貞は皇太子を奉じて北國に赴いたが、天皇はまた逃れて吉野に入らせられた。こゝで、南朝は出來たとともに、京都では光明天皇が立たれて居たので、これに對する北朝も生じたのであつた。その中、義貞も戰死し、天皇も崩ぜられた。後村上天皇が繼がれたが、南方の勢力は微弱であるので、事實足利氏の天下となつてしまつた。乃ち、未來記の獼猴の如きものが、天下を掠めるといふのに合してゐるのである。

未來記に云ふ三十餘年は、第三部に相當する。をり〳〵の大攻擊に都を離れることもあるが、尊氏、及び義詮は、大體京都に蟠屈し、天皇は、崇光、後光嚴と御代は變るが、依然として持明院流である。建設に際しては、諸人協同に働くが、成功すると、弛緩して紛爭を起す。幕府もこの時になると屢々内亂を起す。それが南朝の策動と關係して、をり〳〵その動搖を起す。しかし、基礎を危くするには到らない。從つて、その記事は、おのづから平板に流れやすい。故に作

者は、種々の怪異を點出して、豫告の方法を取つて、興味を起さすやうにしてゐる。勿論、從來も、樣々な豫報的怪異を記してはゐるが、この時の如く甚しくはない。六本杉に天狗が集まるとその相談のまゝに、上杉、畠山が師直を傾けんとする。ところが師直が、卻つて上杉、畠山を滅亡せしめる。尊氏、直義の中が惡くなる。師直が主人を壓迫する。この直義は、南朝に降つて、南方の將士は一度京都に入り込むのであるが、その結果として、師直等は滅亡する。南朝の人々は、尊氏の子の直冬とも聯合して、また京入をするが、忽ちに敗退する。卻つて、北朝軍に大擧して攻め寄せられる。こゝに來ると、文勢を一轉せしめんがために、吉野の御廟の怪事を點出して、またその次の豫告をする。これによつて、北朝軍は退卻し、主な將士の仁木義長、畠山道誓、細川淸氏等は、或は勢蹙り、或は窮死し、或は敗死する。これからは、また内訌のみで、殆んど大事はないが太平記ではない。故に、北野祠頭の僧俗の物語を點出して、これらの、戰亂の根柢的原因を物語らしめる。而して聽者が、「かかる亂の世の中も、又靜なる事もやと憑を殘す。」と思ふので、最後の賴之が、義滿の輔佐になつて、天下が無事になるといふのを暗示し、しかもそこに到つて擱筆してゐる。これらによつて見ると、作者は、たゞ任意に、戰亂を年代順によつて、年表的に記述した譯ではない。まづ全體の綱領をかゞけて置いて、その順序によつて、敍述

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.